
マリアナ物語

hapy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリアナ物語

【Nコード】

N1032D

【作者名】

happy

【あらすじ】

聖マリアナ女学院に入学した夢河杏南の学園物語です。

「ごきげんよう、皆さん」

でた。お決まりの決まり文句。この学校入って1週間経つけどこの挨拶には全然慣れない。

理事長にぺこっとおじぎすると、私はすたすたと教室に向かった。

ここは東京白金セレブの街にでんと校舎をかまえる私立聖マリアナ女学院。偏差値70の進学校でありながら、究極のお嬢様学校だ。

そんな学校に通っていて、毎日を地味に過しているのが私、夢河杏南^{ゆめかわ あん}高1である。勉強とスポーツだけは得意で、一応授業料免除の特待生。でなきゃ、こんな名門校通ってない。

私は中学までずっと公立で、こういうお嬢様系はまったくだめ。だから、話も合わないし、友達は少ない。そんな私が何でこの学校に入ったかっていうと・・・。ずばり！東大に入るためである。この学校は東大進学率が、日本の高校の中で日本1なのだ。私には、東大に入って、経済を学んで、大会社を築くという夢がある。その夢を叶える第1歩として、この学校に入ったのだ。

つと、こんな事考えてる場合じゃなかった。教室いこつから、教室に入る。

「夢河さん。ごきげんよう！」

はあ、でたでた。学校1のお嬢様、理事長の娘で、帰国子女。有革^{ありか}奈^な乃^の。少しウエーブのかかった長い髪に、おにんぎょさんの様な顔立ち。頭脳明晰、スポーツ万能なんだから、ほかにはいない究極のお嬢様ね。

「ご、ごきげんよう。有革奈さん。早いよね。」

「今日は早朝生徒会があつたから。」

「そう。ご苦勞様。」

そういつて、私席に着く。はあ。朝からきついな・・・。

「朝から暗い顔していますわね。杏南さん。絢乃のこと、苦手です

の？」

隣から声がした。うわっ、いたんだ文宮佳音。あやみよかのびくったー。

文宮佳音は一言で言うとお和撫子。しかも親は華道の家元に日本舞踊の師範って言うんだから、凄い人。頭も有革奈より良い。

「う、ごきげんよう・・・、文宮さん。まあね。ああいうタイプは苦手なんだ・・・。」

「絢乃は幼稚園時代から一緒ですけど、悪い人じゃありませんわよ。ただ、ちよっと人懐っこ過ぎるんですわよねえ・・・。」

一人でため息ついてるよ。はあ、全然ついていけないわよお。もう、早く卒業したいーい！

ちりりりりりりりりん。授業開始のチャイムが鳴った。あれ？もうそんなに時間たったんだ。

教科書やノートを机の上に出して、鞆を机の横にかける。ちようどそのとき、通称マドンナ先生が入ってきた。

ふん。先生の授業中の仕事はテキスト配って時間を気にしてるだけでしょ。後、分からないとこだけ解説もらって、授業終了。塾と一緒。

はあ、今日のテキストの説明だ。なにになに・・・。ふーんそういう解き方ね。分かった。

・・・1時間後。

「今日の授業終了。終わんなかった人は、明日までにやってきてね。」

先生が出て行く。何言ってるのよ先生。特別選抜クラスの私たちがあんな簡単なテキスト、1時間の間に終わらせなかったと思う？45分もあれば、楽々終わるわよ！

文宮佳音も同じ事考えてたみたいで・・・。

「全く。馬鹿にしないでいただきたいわ。あんな問題1時かかからないですわよ。30分で十分ですわ！」

えっ30分？私30分じゃ無理かも。さすが大和撫子・・・。あ、有革奈が来た・・・。

「ねね、佳音。さっきのテキスト、簡単だったわねー。先生も、もつとまじな問題なかったのかしら。」

「絢乃もそう思います？あんな問題、中等科の生徒でも、解けてしまっ子いますわよ。」

「そうよねー。ああ、つまんない・・・。」

ええー！。じゃ、聖マリアナの中等科生ってそんな頭いい人いるの！？ひえー！。

はあ、この先、私の高校生活はどうなってしまっんだろう・・・。

- 1 - (後書き)

小学生の私が書いた、生意気な物語ですが、これから宜しくお願
いします。

5月・・・私がこの学校に入学して、もう1ヶ月経った。ごきげんよしの挨拶にも少し慣れてきた。

「夢河さん。ちよつと良いかな？」

放課後、有革奈に呼び止められた。

「え・・・。べ、別に良いけど。」

な、何なのよ・・・。女のいじめだったら最悪だよ・・・。怖いー。

「あのさあ。。何なの一体。」

「えつとね、今日から夢河さんのこと、杏南って呼んでも良いかしら？」

は？な、何だそんな事だったのお。ああ、良かった。

「構わないけど？」

ぱあ。有革奈の顔が明るくなる。

「本当に？嬉しい。じゃ、これからは、私のことも絢乃って呼んで！お願い！！」

ええええ。あんたのこと？ま、いつか・・・。

「いいよ。絢乃さん」

「嬉しい・・・。ありがとう！杏南さん！」

あ、行っちゃった・・・。何だったの。

それから1週間は、時々絢乃と話した。意外と親しみがもてたから、ちよつとほつとしたかな。

でも問題は、文宮佳音のほうで・・・。

「良かったですわね。苦手が克服できて・・・。」

とか何とか言って、いつの間にか後ろに居るの。怖いよ・・・。

「ただいまー。」

たつたつたつた！

「お帰りなさいおねーちゃん」

「ただいまあ。杏歌、良い子してた？」

髪をリボンで束ねた私の妹、杏歌ももかがお迎えしてくれた。小学校1年生。私の宝物。頭良くて、スポーツできて、可愛いんだもん。

「お母さん。お父さん。ただいま。」

うちのお母さんとお父さんは1年前に交通事故で亡くなった。私がこの家の大黒柱なの。っていつても、いまは優しいおじいちゃんが私たちを引き取って、育ててくれるの。あ、後もう1人はどこだ！

「杏泰！降りてきなさい。」

「あ、はい。お帰りねーちゃん。」

この子は私の弟杏泰きょうた、小学校3年生。この子も私の宝物。姉妹思いで、かつこ良くて、気が利くからね。

「今日は何があつた？」

「テストで100点とって、ほめられたよ！」

「杏はねえ、お友達とかくれんぼしたよ！」

「杏泰、よく頑張ったね。えらいよ！杏歌は、面白そうね。」

お母さんもお父さんも居ないけど、寂しくないのは、この子達のおかげかな。ありがと。

翌日、午後の授業のちよつと前。絢乃がしゃべりにきた。

「杏南！今日の小テスト、簡単そうだよね。」

「うん、そうだよね。100点は楽楽かな。」

がら、先生だ。あわてて、席に戻ってく。

テストキタア。うんうん……。よし簡単だこれ！

10分後。ガタツ、あ、絢乃も出来たんだ。提出つと。

カタン。あ、文宮だ。す、何か提出の仕方も綺麗。って見とれてる場合か？席もどろつと。

テストが返ってきた。よしっ100点だ！ちらっ、文宮のテスト用

紙が見える。97点。あ、計算ミスだ。私も良くやるんだよねーって、あれ？何か、手が震えてるような・・・？

6月・・・あのテストの日から、色々文宮から聞き出そうとしたけど、何か近寄りがたい雰囲気以前よりも増えた気がして・・・何なんだろう？あの手の震え・・・。

帰りのホームルーム。何か、文宮から話があるらしい。

「皆さん今までありがとうございます。私は明日から、パリに留学することになりまして、当分休学いたしますわ。」

えっ・・・。そうなの？じゃ今日聞かなくちゃいけないんじゃない。よしっ！

「起立、礼」

ふー終わった。よし！

「文宮さん、ちよつといい？」

「は？え、ええ、何ですか？」

「あのさ、1ヶ月くらい前の、数学の小テスト返された時、手が震えてるように見えたんだけど、私の気のせいかな。」

あ、明らかに動揺してるよー！。手応えあり！

「あ、え、そ、それは・・・。」

あ、よーし！

「今回の留学と何か関係ある？」

「・・・。」

黙ったままとか、卑怯じゃん！！聞き込みだあ！

「何で黙ってるの？」

「・・・。」

「何かまずい？聞かれちゃ？」

「・・・。」

ああーもう、うざったいなあ！

「ねえ、なんか言つてよ！じれったいんだけど！」

あ、口開いた！

「じ、実は……。」

なにになにナニナニ？

「ここではちよつと……。裏庭に……。行けません？」

ああ、ちよつと気が抜ける――！。まいいや。聞けるんだし。

「いいよ、いこ。」

よーしいよいよだ！

「今回の、留学は、私が望んだんじゃありませんの……。」

「うんうん。で？」

「しかし、母と父が、勝手に話を進めまして……。」

「うんうん！」

「私は、嫌だと言いましたわ。そうしたら、『これからは、日本の事意外もしつかり学ばねばな。』って……。」

「ふーん……。で？」

「私は、将来の文宮家の跡取りとして、しつかり学びたいのは、日本のことなんですわ。」

「うわっなんかいきなり力入っちゃってるけど……。まいいや続き続き
「それで、今度のテストで、100点採れなかったら、留学と……。」

「決まっちゃったんだ……。」

「ええ、そういうことなんですの……。」

「やった――！すつきり！。問題解決。ああ、よかった。」

「さようなら、夢河さん。また、いつか会いましょう。と言っても、卒業までには戻ってきますけれどね……。」

「にこつと笑って行っちゃったよ……。なんか急に寂しくなっちゃったよ……。自分が楽しんでいたのが馬鹿みたい……。……。一個問題は解決したけど、これから先、何か問題待っていそうな雰囲気……。……。」

「何言つてゐるのよお、杏南！文宮家に行くの！日本の！」

「へっ！……あ、そうなの。でもなんで？」

「パーティーがあるの。佳音の留学記念で。遅いけど・・・やるの。そこには、佳音のお友達なら誰でも行って良いのよ。どう？行きましょうよ。」

「え、あ、うん。ぜひ行かせてもらおう！」

「わかったわ、ちなみにドレスコードは、「着飾り」ねっ！ちゃんとしたドレスを着ていかなくちゃだめなの。着物でも良いんだけどね。」

e e e e e e e e e e . . .

うっそ、ドレスなんて、持っていないですよおおおお。があああ
あん。

よし・・・・・。正直に言おう・・・・・。

「あのね、ドレスとか、持っていないの……。」

「あ、そうなの！じゃ、私の貸してあげる！似合いそうなの、いっぱい持つてくるから！」

え
・
・
・
・
・
、
スゴ！

で、ついに今日に至った……。今いるのはちょーでかい絢乃のお家。

ピーンポーン

「ハイ、お待たせいたしました。どちら様でしょう？」

ひー！。なんか知らない人の声！緊張！！

「あ、**絢乃**さんと同じ**クラス**の……ゆ、**夢河**ですっ」

「あ、お嬢様のお友達ですね、少々お待ち下さいまし。」

前は杏南が出てくれたんだけど……。今のはメイドさんだったみたい。それにしても、お嬢様って呼ばれてるってすごいかも……。ききーーーーー。

「いらっしやい、杏南！さ、入って！」

「あ、うん。おじやましーす。」

2回目だ。家に入るの。

「あれ？この前連れて来てた。オチビちゃんは？」

「ああ、妹と弟なら、おじいちゃんが見てくれてる。友達は大切に
しなさいって出してくれたの。」

「そうなんだ。ふふ、いいおじいちゃんね。」

「ありがとう。おじいちゃん喜ぶわ。」

はあ、こう言う会話って、家じゃあんまりないからな。楽しい！

「私の部屋いこっ」

「うん。」

「早紀姉さん！お茶お願いね。」

「分かったよー。お嬢様。今すぐに！」

タントントン階段を上る。

「早紀姉さんって誰？」

「メイドさん。赤和早紀って名前の25歳なの。メイドさんなんて
呼ぶのいやだから、姉さんって呼んでるの、それに私、1人っ子だ
からさ。」

「ふうん……。そうなんだ。」

こんな色々話してたら1時間たって、いま、やっと、部屋のクロー
ゼットに向かっていくところ。

「好きなドレス選んで！あ、私のはこれね！」

うわあ、可愛い！赤のワンピースに黒リボン、黒の七分丈ボレロが本当
に合ってる。

「すごいー。可愛いね！私も選んでいいの？本当に」

「良いよー。ささ、えらば。私も手伝うよ。」

「うん」

でも……。10着くらいある。うー。うー。うー。あ、あの
白いやつ！

「よいつしよつと……。」

「あ、それ可愛いよ。似合うと思って、真ん中おいといて正解つと。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032d/>

マリアナ物語

2010年11月20日15時18分発行